

【モータースポーツコラム】

筆者：石田 徹

＜ワクドキの楽しさをひとりでも多くの人に伝えたい＞

自分とモータースポーツの関わりは、大きく3つの時期に分かれます。最初の20年は自動車雑誌の編集部員でしたから、もちろん“(レースは)取材するもの”でした。ただ、レース専門誌は出していない会社だったので、編集部には1名か2名のモータースポーツ担当という狭き門をクリアする以外、レースを取材する機会はなかなか巡ってきません。

ただし雑誌を売るための特集として、サーキットでの「トヨタ DOHC 対 日産ターボ」「ボーイズレーサー全開対決」なんていう記事を頻繁に企画する時代でした。となればタイムアタックはもちろん、映える写真撮影用に逆ハンを切って（ハンドルを逆に切る、カウンターステアのこと）くれるプロを呼ぶことになります。



携帯電話もない当時、星野一義さんや中嶋悟さんの自宅に“ジーコジーコ”とダイヤルして、「すみません、●月●日の早朝に筑波に来ていただけませんか？」とお願いしたのは懐かしい思い出です。

石下に定宿のある星野さんは「いいよ」と一言。今は廃業している、サーキット門前の食堂がお気に入りだった中嶋さんは「じゃあ、あの部屋取っておいてね」というのが定番でした。

こうしてレースにはあまり行けなかった自分ですが、星野さんや中嶋さん、亜久里さんなどに密着して取材し、「あれがウーだから、ドーンなんだよ」という口頭でのインプレッションを文章化した経験も（星野さん、失礼！）、エディターやライターとしての自分を大きく成長させてくれました。



転機は不惑もとうに過ぎた2000年、40代の半ばから始まりました。年に一度、業界の腕自慢が楽しみにしている「メディア対抗ロードスター4時間耐久レース」に、なんと！デビューしちゃったのです。

前年にチームが準優勝したため、恒例で重いハンデキャップを課されます。なので、この年は編集部員だけで楽しもうという方針で、ロートルの自分にも声が掛かったわけです。

これでA級ライセンスを手にしたところに、マツダからナンバー付きのレース仕様NR-Aが（2001年に）リリース。なんだか罠にはまったように新車を購入してしまい、2002年のパーティレース開幕から本格的なキャリアが始まります。

そう、ここで自分にとってレースは“参加するもの”に変わったのです。

最初の1、2年は前のクルマがミスしてくれない限り、練習走行でもひたすら抜かれてばかりでした。星野さんや中嶋さんのスーパーテクを身近で見えていましたから、頭でっかちで理論を語ることはできても、正直言って運転のセンスもテクニックも持ち合わせがありません。



でも、石の上にも3年ぐらいで、少しずつですがスキルも上がってタイムも縮まってきました。決勝本番で先行車のスリップを抜けて前へ出られた数少ないシーン（たぶん2回ポッキリかな？）は、一生忘れられない宝物のような記憶です。

その後、50代半ばに突然のリストラでフリーランスとなり、業界の片隅で細々と生きていた自分に、古巣のパーティレースから「公式レポーターをやりませんか？」という有り難いお誘いをいただきました。

2016年から現行のNDロードスターが主役になるのを機に、そろそろ2世代前の自分のNBロードスターが出場できなくなるタイミングでもありました。

現在はロードスターを中心とするマツダ車と、86/BRZを主な対象として、各地のローカルシリーズやスーパー耐久までを取材しています。こうしてまた“取材するもの”になったレースですが、国際C級まで昇格した競技ライセンスと、ホームコースの筑波のサーキットライセンスだけは更新し続けています。

いつまでも“ワクワク&ドキドキ”していた参加者時代の初心と目線を忘れないように、寄り添っていこうと思っています。





(プロフィール)

石田 徹 (いしだ とおる) / 東京都出身 1955年生まれ

1978年、モーターマガジン社に入社。ホリデーオートをはじめ多くの4輪誌の編集部に所属。レース担当時代は当時の全日本F2や富士グラチャン、日本初開催のWECなどを取材し、ル・マン24時間やWRC1000湖ラリーなども現地で経験。自身の本格的なレース参戦は2002年からで、2014年以降は年に数回のサーキット走行を楽しむ程度。2011年からフリーランスとして活動を始め、2015年12月に日本モータースポーツ記者会に入会

